



希望をもって生きる

～震災10年目の節目に～

10年前の今日、3月11日午後2時46分、東日本大震災が一瞬にして多くの人の日常を奪い去っていきました。その時、宮城県南三陸町の職員だった遠藤未希さんは、防災対策庁舎2階で「6メートルの津波が来ます。避難してください。」と、何度も住民に呼びかけました。未希さんのご両親は、放送を聞いた人から「放送が途中で切れて…最後のほうは声が震えていた」と、後に聞かされました。その後、津波にのまれ赤い鉄筋だけが無残に残された庁舎周辺のがれきの中を、二人で歩き続けました。

「しっかり頑張ったね。でも、何も命を張ってまで…。」

母親の美恵子さんは、いたわりと無念さにそうつぶやきました。9月に結婚式を控え、ウエディングドレスを美恵子さんと一緒に見に行くのを楽しみにしていた未希さんでした。津波から40日後、生前ご主人が贈ったミサガ(幸運のブレスレット)とともに、未希さんの亡きがらは家族の元に帰ってきました。

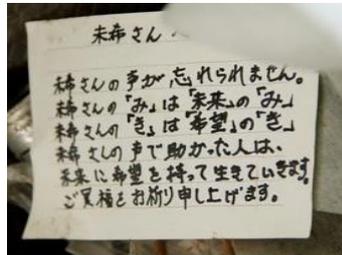
住民の一人が避難所に張ったメモ用紙には次のように書かれていました。

「未希さんのことが忘れられません。未希さんの「み」は「未来」の「み」、未希さんの「き」は「希望」の「き」。未希さんの声で助かった人は、未来に希望をもって生きていきます。」

私たちは日々の生活の中で、「今生きていること」を特別に感じることはほとんどありません。しかし今日こそは、「授けられたこの命を輝かせて生きよう」と、決意を新たに、希望をもって生きていこうではありませんか。



遠藤未希さん



避難所に貼られたメモ



南三陸町避防防災対策庁舎

巣立ちのときに向けて

いよいよ3年生が詫間中学校を巣立っていくときがやってきました。卒業という「美しき旅立ち」のために、校舎の至る所で一生懸命清掃に励む姿が見られました。

「毎日の清掃活動を見れば、どのような学校なのかがわかる」とよく言われます。「詫間中のよき伝統」を後輩たちに託す3年生は、学び舎を心を込めて磨き、巣立ってゆきます。

